

### 8. 少女と妖精たち（イロカノ）

昔々、5人の娘を持った夫婦がいました。彼らは森の近くの小さな小屋で、平穏に、愛と幸せに包まれて生活していました。

夫婦は愛する娘たちとの楽しい生活を誇りに思っていましたし、お互いが分かち合う素晴らしい生活をうれしく思っていました。5人の少女たちのうちで、最も幼いのは、6歳になるマクシンという名の娘でした。彼女は、美しく、かわいらしくだけでなく、勇敢で冒険心に富んでいたことで、特別でした。彼女には、魅惑的なインドシナの黒い瞳、かわいい鼻、そして真っ直ぐな黒く長い髪によって、天使のようなアジアの顔を構成していました。

マクシンは自然の美しさを愛していました。彼女は花を咲かせる植物、樹木、ガーガー鳴く蛙の音、彼らの小さな庭にいる鳥や蝶を愛し、そこで長い時間座って、「ドワガイ」と呼ばれる楽器を奏していました。この楽器は、バイオリンに良く似ています。

ある朝、マクシンの両親が、野菜畠でさつまいもの収穫に忙しくしている頃、彼女は小さな花畠に幸せそうに座って、彼女の「ドワガイ」を奏していました。その時、彼女は一番きれいな蝶たちが花から花へは東いているのに気付き、それを見ました。彼女は微笑んでそれをじっと見、どうして彼女のような幼い子は飛ぶことができないのか、と不思議に思っていました。

マクシンは、羽のある生き物に魅了され、どこにでも行きたいところへ行く彼らを追いかかけました。彼女は彼らの美しさと能力に圧倒されました。彼女は時間が経過したことにも気付かず、今や家の近くの森に入っていました。

その森は、多くの植物、木々、昆虫、動物、良い霊や悪い霊の住まいであり、何百もの美しい羽のある妖精たちの住まいでもありました。

この特別な朝、いくつもの妖精たちが池のそばで、遊んだり歌ったり、踊ったりしていましたが、その池には、魅惑的なスイレンの花が咲いていました。妖精の地は、素晴らしい場所で、わたしたちの世界に似ていますが、まったく違う次元に存在しています。そして、私たちの世界に沢山の国籍があるように、妖精たちも多くの違った種類がありました。マクシンが会おうとしている特別な妖精のグループは、要請の地でもっとも美しい妖精た

ちでした。それらのいくらかは、ブロンドの髪に青い目をしたコーカサスの妖精で、ほかに褐色の肌をして運動神経が発達しているアフリカの妖精たちもいるし、黄色い肌で魅惑的な様子の、柔らかな優しい、しとやかさを持ったアジアの妖精もいました。彼らは、花から花へ飛んでいる美しい蝶の群れを追いかけてきたマクシンが、近づいていることに気付きました。「何という美しい子どもだこと！」と、ある妖精が言いました。「彼女と遊ぼう」と他の妖精が言いました。

「ここにちは、小さなお嬢さん。あなたは私たちと来て、遊びたいかい？」とある妖精が言いました。巻き芯は彼女の目を信じられませんでした。彼女は羽のある妖精たちを見て、魅了されました。彼らは人間のように見えるのですが、羽があって、蝶のように飛べるのです！「あなたたちは妖精なんですか？」と彼女は聞きました。「はい、そうですよ。」とその少女の周りでクスクス笑っている、他の妖精たちのひとりが言いました。「しかし、私はあなたのことを単なる物語の中の存在として、妖精の物語の、存在だと言われていました。」とマクシンは問いました。「それは、何百年も前に、私たちを見た人はわずかだったからです。私たちは、自分たちのことを本当に特別な人びとにだけ、姿を表すのです。そしてそれはただひとりの時にです。」と、格好のいい濃い色の肌をした妖精が言いました。

すぐにマクシンの上を回って飛んでいる美しい妖精たちが、彼女を振り動かし、くすくす笑って彼らのグループに入るよう招きました。「どうか、私たちと遊んでください。」と彼らは言いました。魅了するような小さな少女は大きな微笑で答えました。「はい、勿論です。私は遊ぶのが好きなの。」

そして、マクシンと妖精たちは楽しく歌い、踊り、遊びました。それは小さな少女には永遠の時のように思いました。彼女はそれまでの生涯でこんなに楽しいことはありませんでした。彼女は、自分が本当の妖精たちと会って、一緒に遊んだことを姉たちが聞いたら、どんなに羨ましがるだろう、と考えていました。しかし、彼女たちはきっと信じないでしょう。信じないに決まっています。大人たちはいつも「妖精はおとぎ話の中だけで生きている。」と言っているからです。

ついに、空は暗くなり、雨がふりそうになりました。マクシンは言いました。「私は家に帰ったほうがよさそうだわ。私の両親はすぐに私を捜し始めるわ。」

## フィリピンの神話と伝説

ひとりのアジアの妖精が、マクシンを慕って、彼女のところに来て、言いました。「私は、あなたが家に帰る途中で、雨に濡れてほしくないわ。この傘を持っていってください。これは妖精の世界からの特別な贈り物です。」

マクシンはそのかわいい傘を取って、妖精たちに、優しさと気前のよさに対して感謝を述べました。何と楽しい体験だったことでしょう。今日起こったことを彼女は生涯忘れないでしょう。

彼女が雨の中を、傘を差しながら、歌いながら、飛び跳ねながら、楽しそうに家に歩いて帰りました。彼女が家に着いた時、彼女の姉たちが昼食の手伝いをして両親を助けているのを見ました。枯れerらは、マクシンの傘を見ました。「何とかわいい傘なんでしょう。」とひとりの姉が言いました。「どこに行っていたの？」と他の姉が聞きました。「それ、貸してくれる？」と3番目の姉が聞きました。

マクシンは、昼食を食べている間に、彼女がどのようにして美しい妖精たちに会って、傘をもらったかという話をすべて話しました。彼女の姉たちは、彼女の言うことを、彼女がただ、妖精の話作っているのだと思って、ただ笑うだけでした。彼女が本当に妖精と呼ばれる者に会ったとは信じませんでした。

その日遅く、マクシンと彼女の姉は、庭でかくれんぼをしていました。マクシンは、遊ぶために、古いアカシアの木の下に傘を置きました。少女たちはかくれんぼをして、この遊びを何時間も彼女たちがみんな疲れるまでやりました。彼らはみんなやめて、家の中に入ることにしました。

疲れたマクシンは彼女が置いていた傘を取りに行きました。しかし、彼女は疲れていて、地面に突き刺さった傘を抜こうとしたのですが、抜くことができませんでした。すぐに少女たちは、母親が夕食だから家に帰るように呼びました。

がっかりしたマクシンは、寝にゆきましたが、悲しい夜、彼女のかわいい傘は、古いアカシアの木の近くで、地面に刺さっているのです。彼女はその特別の傘を次の日、見せたかったのです。

次の朝、マクシンは目を覚まして、傘が刺さっている同じ場所に走りました。もしかしたら、今度は抜けるか、もう一度やってみようと思ったのです。彼女が驚いたことには、一本だった傘が、同じような傘をたくさん作り出していたのです。「すごい！たくさんあること。」彼女は独り言を

言いました。

マクシンは家に帰って、お母さんを連れてきました。彼女は、古いアカシアの木のそばの傘が増えたのを見せて、また、その傘を手に入れた話をしました。彼女の母はそれを見て、娘を信じました。そのことは、彼女をうれしくさせました。彼女の母はマクシンを抱いて言いました。「ごくまれに、奇跡は起こるんです。私たちはそう信じなければなりません。」

マクシンの母は台所のナイフを取って、地面から生えている傘の画を切り、マクシンに与えました。その小さな少女は、友だちに、彼女のかわいい傘を見せられることと、そして彼女が会い、一緒に遊んだ妖精たちのこと、本当の妖精たちのことを話せるので、うれしくなりました。

これはタロ芋の伝説で、この野菜のことをフィリピンでは「ガビ」と呼びます。